

ひなと 夏祭りの 迷子のこぎつね



この本について

On the last summer festival night in Kyoto, seven-year-old Hina finds a tiny fox cub lost among the lantern-lit stalls. Together they wander through goldfish scooping, taiko drums and shaved ice, following paper lanterns up the shrine steps to find the cub's family. Just as the first firework blooms over the river, Hina learns that the bravest thing a small person can do is help someone smaller.



ひな



白いこぎつね



ひなの家族



こぎつねの家族

提灯がともる夜

提灯がともる夜

京都の空が、もも色から深い青へ変わるころ、夏祭りの提灯がいっせいにともりました。七歳のひなは、青い金魚もよりの浴衣を着て、家族といっしょに神社へつづく参道を歩きます。からん、ころんと下駄が鳴り、あたたかな灯りが、ひなの丸いほおをやさしく照らしました。

道の両がわには屋台がずらりと並び、たこ焼きの香ばしいにおい、焼きとうもろこしの甘いにおい、ふわふわの綿あめのにおいが、夜風の中でまざっています。ひなは鼻をくくんさせて、「夏のおいしいにおいが、ぜんぶ集まってるね」と笑いました。

遠くでは、どん、どどん、と太鼓が鳴っています。近くの軒先からは、ちりん、ちりん、と風鈴の音も聞こえました。大きな音と小さな音が重なるたび、ひなの胸まで祭りの調子で弾みます。金色の提灯は、川へ流れる星のように、参道の先までつづいていました。

「ひな、ゆっくり歩こうね」とお母さんが呼びました。ひなは「はい」と元気に返事をし、お父さんのそばへ戻ります。けれど、きらきら光る店を見つけるたび、足はわくわくと前へ出ました。この夜、ひなはまだ知りませんでした。小さな出会いが、心に残る旅の始まりになることを。



金魚がきらり

金魚がきらり

参道のまんなかで、ひなは水色の光を見つけました。金魚すくいの屋台です。浅い水そうの中を、赤い金魚、白い金魚、黒い出目金が、すいすい泳いでいます。水面には提灯の明かりが細かく揺れ、金魚が星のかけらを追いかけているように見えました。

ぴちゃり、ぴちゃり、と尾びれが水をたたきます。水には涼しいにおいがあり、その向こうから、しょうゆを塗ったおせんべいの香りが流れてきました。ひなはしゃがみこみ、薄い紙を張ったポイを持つ子どもたちを見ます。「そっと、そっとだよ」と、思わず小さな声で応援しました。

一匹の金魚がするりと逃げると、みんなが「ああっ」と声を上げました。ひなも笑いましたが、そのとき、屋台の布のかげで白いものが動いた気がしました。綿あめの袋でしょうか。それとも、落ちた手ぬぐいでしょうか。提灯の光が揺れるたび、白い先がちらりとのぞきます。

ひなは家族の近くにいることを確かめてから、ほんの少しだけ横へ動きました。すると、「くうん」と、風鈴よりも小さな声が聞こえます。ひなは笑うのをやめ、耳をすませました。「だれかいるの？」と、やさしくたずねます。布のかげで、白いものがもう一度ふるえました。



白いこぎつね

白いこぎつね

ひなが屋台の横からそっとのぞくと、そこには小さな白いこぎつねがいました。雪のような毛はふわふわでしたが、丸い体は葉っぱのようにふるえています。耳はぺたんと下がり、しっぽは足に巻きついていました。けれど目だけは、ぬれた黒豆のようにきらりと光っています。

「だいじょうぶ。びっくりさせないよ」と、ひなは言いました。すぐには手を出さず、自分の胸に手を当てて、ゆっくり息をします。屋台では金魚の水がぴちゃぴちゃ鳴り、甘い水あめのにおいが漂っていました。赤い提灯の光が、こぎつねの白い背中を桃色に染めます。

こぎつねは鼻をひくひくさせました。ひなの浴衣の金魚を見ているようです。「これは本物の金魚じゃないよ。泳がないから安心してね」と、ひなはささやきました。こぎつねの耳が、ほんの少しだけ立ちます。ひなはうれしくなりましたが、大きな声は出しませんでした。

お母さんとお父さんも近くへ来て、静かに見守りました。「迷子なのかもしれないね」とお母さんが言います。ひなはうなずき、両手を低く差し出しました。こぎつねは一步、もう一步と近づき、ひなの腕へ体をあずけました。その体はあたたかく、心臓がとくとく鳴っていました。



ひなの小さな約束

ひなの小さな約束

ひなはこぎつねを胸の前でやさしく抱きました。ふわふわの毛からは、乾いた草とお日さまを合わせたようなにおいがします。こぎつねはまだ少しふるえていましたが、ひなの腕の中で丸くなりました。「おうちをさがそうね。ひなもいっしょに行くよ」と約束しました。

お父さんは「みんなで、ゆっくりさがそう」と言い、お母さんはひなの帯がほどけていないか確かめました。家族は人の流れをじゃましないよう、参道のはしを歩きます。がやがやという話し声の上を、笛の高い音がすべり、黄色い提灯が夜風の中でゆらゆら揺れました。

「どっちから来たの？」と、ひなはこぎつねに聞きました。こぎつねは言葉では答えず、鼻を右へ、左へ動かします。焼きそばのソースのにおいには、くしゅん。綿あめの甘いにおいには、もう一度くしゅん。ひなは思わず笑い、「お鼻がいそがしいね」と言いました。

すると、こぎつねのふるえが少し止まりました。小さな前足が、ひなの袖をきゅっとつかみます。ひなは、その力を感じて背すじを伸ばしました。自分も七歳の小さな子どもです。それでも、もっと小さなだれかのためなら、目をよく開き、耳をよくすませて歩ける気がしました。



たこ焼きの湯気の向こう

たこ焼きの湯気の向こう

最初に通ったのは、たこ焼きの屋台でした。鉄板の上で丸いたこ焼きが、くるん、くるんと回っています。じゅうっという音といっしょに白い湯気が上がり、だしと青のりの香ばしいにおいが広がりました。電球の明るい光を受けて、湯気まで金色に見えます。

こぎつねは湯気を見て、ひなの腕から首を伸ばしました。けれど熱そうだと分かったのか、すぐに鼻を引っこめます。「あつあつだから、見るだけね」とひなが言うと、屋台のおじさんも「小さなお客さんには熱すぎるなあ」と、やわらかい声で笑いました。

ひなは、白いきつねを見かけなかったか、たずねてみました。おじさんは竹ぐしを動かしながら考え、「少し前に、白いしっぽが神社のほうへ行くのを見たよ」と教えてくれました。その言葉を聞くと、こぎつねの耳がぴんと立ち、遠い太鼓の音へ向きました。

「うちのだれかかもしれないね、ひな」とお母さんが言いました。ひなはうれしくなり、こぎつねと鼻を近づけます。「手がかり、ひとつ見つけたよ」。ソースのにおいをのせた風が、神社のほうへ吹きました。家族は提灯の明かりを目じるしに、また歩き出しました。



たこ焼き



ソース
しょうゆ
ねぎ塩
600円



たこ焼き



かき氷の青い山

かき氷の青い山

人の多い場所を歩いたので、ひなの額には小さな汗の玉が光っていました。お母さんが青いかき氷を一つ買い、家族で立ち止まります。しゃり、しゃり、と氷を削る音は、雪が降る音のようでした。ラムネの甘く涼しいにおいが、火照ったほおをすっとなでます。

ひながひとさじ食べると、舌が青くなりました。「見て」と舌を出すと、お父さんが笑い、こぎつねも首をかしげます。氷の器からこぼれる青い光が、ひなの浴衣の金魚と重なりました。こぎつねには、冷たい水を指先につけて、ほんの少しだけなめさせました。

こぎつねはぺろりとなめると、目を丸くしました。そして、もう一度ひなの指へ鼻を寄せます。「つめたくて、おどろいたね」と、ひなは笑いました。近くの風鈴が、ちりりん、と返事をします。さっきまで固かったこぎつねのしっぽが、ゆっくり左右に動き始めました。

そのとき、こぎつねが急に神社のほうを見ました。太鼓の合間に、かすかな「こん」という声が聞こえたのです。ひなも耳をすませましたが、屋台の呼び声にまぎって、もう聞こえません。それでも、こぎつねの黒い目には新しい光が宿っていました。「きっと近いよ」と、ひなは励ましました。



氷

涼しいね

涼しいね

かき氷

りんご飴の赤い光

りんご飴の赤い光

次の屋台には、りんご飴が宝石のように並んでいました。まん丸の赤い飴は提灯の光を映し、つやつや、きらきら光っています。甘酸っぱいりんごの香りと、砂糖を煮た濃い甘さが鼻をくすぐりました。ひなはこぎつねに、「赤いお月さまみたいだね」と話しかけました。

屋台の横には、きつねのお面も下がっていました。白い顔に赤い模様のあるお面が、風に吹かれてこつん、こつんと触れ合います。こぎつねはお面を見上げ、自分の顔とくらべるように鼻先を動かしました。ひなは「ちょっと似てる。でも、あなたのほうがふわふわ」と笑います。

お面を売る人は、ひなたちの話を聞くと、参道の先を指しました。「神社の石段の近くで、白いきつねを見たという人がいたよ」。赤いりんご飴の光の向こうに、一列の提灯が見えています。その灯りは屋台の間を抜け、木々の深い緑へつづいていました。

こぎつねは、ひなの腕の中で小さく身を乗り出しました。しっぽが、ぱた、ぱた、と帯をたたきます。「うれしいの？　じゃあ、あの灯りをたどろう」とひなは言いました。家族も笑顔でうなずきます。甘い香りに見送られ、みんなは赤と金の光の道へ進みました。



どんどん太鼓の道しるべ

どんどん太鼓の道しるべ

提灯の道を進むと、太鼓のやぐらが見えてきました。どん、どどん。どん、どどん。大きな音が夜の空気を丸くふるわせ、ひなの足の裏まで響きます。やぐらの上の赤いちょうちんは、音に合わせて弾んでいるようでした。汗と木の太鼓の、夏らしいにおいもします。

こぎつねは最初の一打で耳を伏せました。ひなはすぐに片手で白い耳をふんわり包みます。「だいじょうぶ。これは、お祭りの太鼓だよ。いっしょに数えよう」。どんで一つ、どどんで二つ。ひなが小さく調子を取ると、こぎつねの耳が少しずつ戻りました。

太鼓の音が止む短い間に、また「こん、こん」という声が聞こえました。今度はひなにも、はっきり聞こえます。こぎつねは石段のあるほうへ前足を伸ばしました。ひなの胸がぱっと明るくなります。「あっちだね。ちゃんと聞こえたよ」と、こぎつねの背をなでました。

太鼓がもう一度鳴り始めると、ひなたちはそのリズムに背中を押されるように歩きました。どん、どどん、からん、ころん。太鼓と下駄が、元気な行進の音になります。屋台の油のにおいはしだいに薄れ、かわりに木の葉と湿った石の涼しい香りが近づいてきました。



いち、に、
さん、し...

風鈴が教えたこと

風鈴が教えたこと

参道のにぎわいを少し離れると、風鈴を並べた小さな休み所がありました。青、緑、金色のガラスが月明かりを受け、透き通って光っています。風が通るたび、ちりん、ころん、ちりりん。たくさんの涼しい音が重なり、火照った夜に見えない水が流れるようでした。

短冊には、願いごとが細い文字で書かれています。紙のにおいと、そばの竹から漂う青い香りがしました。ひなは一つ一つの風鈴を見上げ、「みんな、ちがう音だね」と言います。こぎつねも耳をくるくる動かし、たくさんの音から大切な一つを探していました。

ひなも目を閉じました。太鼓の音、屋台の声、下駄の音を心の中でそっと分けます。すると風鈴が鳴りやんだ一瞬に、石段の上から「こん、こん、こん」と呼ぶ声が落ちてきました。こぎつねが「くうん」と答えると、上の木の葉がさらさらと揺れました。

「ひな、よく聞けたね」とお父さんがほめました。ひなは首を横に振り、「こぎつねが教えてくれたんだよ。静かにすると、大事な音が見つかるって」と答えます。風鈴の青い光が白い毛に映りました。ひなとこぎつねは顔を見合わせ、今度こそ同じ方向を見ました。



提灯を一つずつ

提灯を一つずつ

神社の石段の前には、小さな提灯が一行に並んでいました。一つ目は赤、二つ目は黄、三つ目は白。ひなは迷わないよう、声を出して数えます。「一つ、二つ、三つ」。こぎつねも腕の中で頭を上下させ、いっしょに数えているようでした。

石段の下では、祭りの音がまだにぎやかに続いています。けれど上からは、葉のすれるさらさらという音と、虫のりんりんという声が聞こえました。土と苔のしっとりしたにおいが夜風にまざり、屋台の甘い香りとはちがう、静かな夏を運んできます。

ひなは一段目に足を置きました。下駄が石に、こつん、と当たります。こぎつねを抱いているので、急がず、手すりの近くを歩きました。お父さんとお母さんもすぐ後ろです。提灯の丸い光が足もとを順番に照らし、次に進む場所を教えてくださいました。

「ひな、つかれたら言ってね」とお母さんが声をかけます。「まだだいじょうぶ。だって、この子のおうちが近いもの」と、ひなは答えました。こぎつねはひなのあごをぺろりとなめます。くすぐったくて笑うと、石段の上からも、やさしい「こん」という声が返ってきました。



月の石段

月の石段

石段の半分まで来ると、木の枝の間から丸い月が見えました。月の光は白い布のように石段へ広がり、こぎつねの毛を銀色に変えます。ひなの青い浴衣には、泳ぐ金魚の模様がくっきり浮かびました。夜露を含んだ葉から、青く涼しいにおいがします。

ひなの足は少し重くなりました。腕もじんわり疲れています。するとこぎつねは身を小さく丸め、抱きやすい形になりました。「ありがとう。あなたも、ひなを助けてくれるんだね」。ひなが言うと、こぎつねは小さく「くう」と鳴きました。二人の息が同じ速さになります。

下から聞こえる太鼓は、もう遠い波の音のようでした。かわりに、石段の上で小枝を踏む、かさりという音がします。こぎつねの鼻が何度も動き、甘い花のにおいを追うように上を向きました。そこには、きつねの像の足もとを照らす明かりが見え始めています。

「あと少しだよ、ひな」とお父さんが言いました。ひなは深く息を吸い、最後の段へ向かいます。一段、また一段。急がず、止まらず、しっかり進みました。こぎつねのしっぽがひなの腕をふわりとなでます。そのやさしい感触が、「いっしょなら登れるよ」と伝えていました。



きつねの像のそばで

きつねの像のそばで

石段を上りきると、二つのきつねの像がひなたちを迎えました。石のきつねは胸を張り、長いしっぽを足もとへ巻いています。左右の灯籠には静かな火がともり、その光が境内をはちみつ色に染めていました。杉の木とお香の落ち着くにおいが漂っています。

ひなの腕の中で、こぎつねが「こん！」と鳴きました。すると像の後ろから、「こん、こん！」と、うれしそうな声が返ります。白い耳が一つ、二つと現れ、やがて大きな白いきつねと、もう一匹の小さなきつねが姿を見せました。どちらの目も、ほっとした光で輝いています。

こぎつねはひなの腕を見上げました。ひなはしゃがみ、両手を地面の近くまで下ろします。「ほら、おうちの人だよ」。こぎつねは一度だけひなの指に鼻をつけ、それから白い家族のもとへ走りました。小さな足音が、たたた、と石の上で軽やかに響きました。

大きなきつねは、こぎつねの顔や耳を何度もなめました。もう一匹は、しっぽをぶんぶん振っています。ひなは胸がふわっとあたたかくなり、目の奥が少しだけ熱くなりました。悲しいのではありません。さがしていた相手に会えた喜びが、灯籠より明るく胸にとまったのです。



ふわり、ありがとう

ふわり、ありがとう

白いきつねの家族は、ひなの前に並びました。大きなきつねがゆっくり頭を下げると、小さな二匹もまねをします。言葉はなくても、「ありがとう」が伝わりました。お香のやさしいにおいの中で、灯籠の火がふわりと揺れ、虫たちもりんりと静かに歌っています。

助けたこぎつねは家族のもとから戻り、ひなの手のひらへ白い鼻を押し当てました。毛はもうふるえていません。体いっぱい安心して満ち、耳もぴんと立っています。ひなは頭をなで、「会えてよかったね。ひなも、とってもうれしいよ」とささやきました。

そのとき、こぎつねのしっぽから小さな白い毛が一本、ふわりと落ちました。月の光を受けた毛は銀の糸のようです。ひなが拾うと、手のひらでかすかに温かく感じられました。それは贈り物というより、今夜のやさしい時間を覚えておくための印のようでした。

「そろそろ花火の時間だよ」とお父さんが言いました。遠い川のほうから、人々の楽しそうな声が届きます。ひなはきつねの家族に手を振りました。こぎつねも前足を少し上げたように見えます。ひなたちは石段を下り、提灯が輝く川辺へ向かいました。



川の上の大きな花

川の上の大きな花

川辺に着くと、夜風がひなの袖をふくらませました。水からは、石と草の涼しいにおいがします。祭りの屋台は少し遠くなりましたが、たこ焼きやりんご飴の甘く香ばしいにおいが、まだかすかに追いかけてきました。川面には、たくさんの提灯が長い光の帯になって揺れています。

みんなが空を見上げたとき、ひゅるる、と細い音がのぼりました。次の瞬間、どおん。大きな花火が川の上で開きます。赤、青、金、緑。光の粒が夜空いっぱいに広がり、ひなの瞳にも、浴衣の金魚にも、きらきらと映りました。川も色を変えて笑っているようです。

ひなは神社のほうを振り返りました。木々の間に、白い小さな影が三つ並んでいるように見えます。いちばん小さな影がしっぽを振ると、金色の花火が空に咲きました。「見ているかな」とひなが言うと、お母さんは「きっと、いっしょに見ているよ」と答えました。

どおん、ぱらぱらぱら。音は大きくても、ひなの胸は静かであたたかでした。小さなこぎつねを抱いた感触も、とくくとく鳴る心臓も、もうふるえていない白いしっぽも覚えています。ひなは手のひらの白い毛を握らず、飛ばないように、そっと包みました。



いちばんの勇氣

いちばんの勇氣

花火が終わると、夜空には細い煙がふわりと残りました。火薬のにおいに、川風と夏草の香りがまざります。人々の拍手が大きな波のように広がり、やがて祭りの笛と風鈴の音が戻ってきました。ひなは家族と手をつなぎ、提灯の道をゆっくり帰ります。

「ひな、今日はよくがんばったね」とお父さんが言いました。ひなは少し考えました。重い物を持ち上げたわけでも、高い場所から飛んだわけでもありません。ただ、ふるえている小さなこぎつねを見つけ、そばにいて、家族のところまでいっしょに歩いただけでした。

けれどひなには分かりました。小さな者にやさしくするには、その声を聞くことがいる。急がず待つことがいる。自分より小さな手を、途中で放さないことがいる。「小さな者にやさしくすることが、いちばんの勇氣なんだね」と言うと、お母さんは強くうなずきました。

青い金魚もようの浴衣が、夜風にさらりと鳴りました。遠い神社から「こん」と聞こえた気がして、ひなは振り返ります。提灯の光の中で、白いしっぽが一度だけ揺れたように見えました。「またね」とひなが手を振ると、夏の夜も、やさしく光を振り返りました。





🇳🇴のPlyxが❤️を込めて制作



デジタル版およびオーディオ版をスキャンしてください